

M U MEMOTO
M E M O R I A L
S E R V I C E
G R O U P
FOR L E P R A SINCE 1950

梅本記念救ライ奉仕団



ハンセン病とは

かつて「らい病」と呼ばれた病気で「不治の病」あるいは「遺伝する病気」として不当な差別を受けた歴史を持つ病気である。

結核菌によく似た「らい菌」による感染症で、現在では「DDS」や「プロミン」その他の抗生物質による治療が可能になっている。しかし根強い偏見のため社会的差別を受けている患者がまだ世界中に約1000万人いるといわれている。



梅本記念救ライ奉仕団理事長
神奈川歯科大学
口腔細菌学教室教授

理事長挨拶

梅 本 俊 夫

世界中にはアジアとアフリカを中心として、現在でも約1000万人のハンセン病患者がいると推測されています。日本でも明治時代には約10万人の患者がいましたが、いまでは7000人程度に減少しています。その原因は薬の進歩と感染防止の徹底にあります。その礎は明治24年に外国人宣教師のハンナ・リデル女史により回春病院が開設されたことにあるといえます。すなわち日本のハンセン病の減少は外国人の社会的奉仕に負うところが大きかったといえます。今、経済大国となった日本が国際的に社会奉仕を行なうのは当然であるといえましょう。

私達の救ライ奉仕活動は昭和25年に大阪歯科大学の学生クラブ活動として始まりました。当初は、日本国内の療養所への慰問活動が主でしたが、昭和35年から歯科診療奉仕を始め、38年までは国内、昭和39～42年 台湾、昭和43～現在 韓国、昭和56～60年 フィリピン、昭和62年～現在までタイに於て歯科診療奉仕を続けてきました。平成3年度からはNGOとして日本政府からの援助を受けつつ活動を続けています。

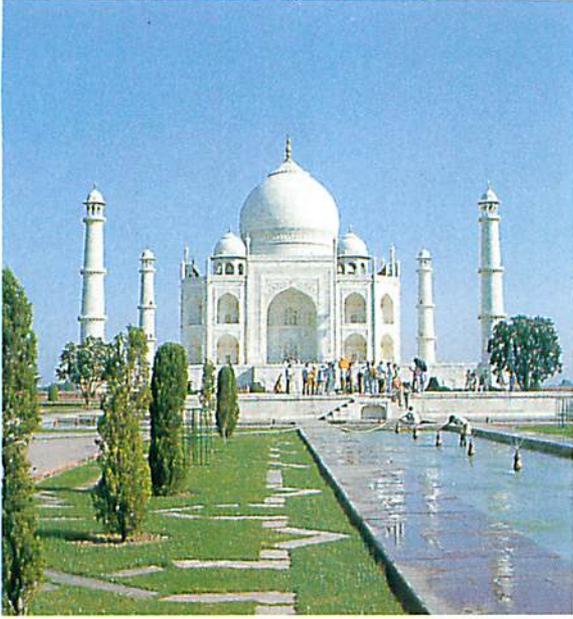
私達は、医療人としての自覚をもって奉仕活動を続ける覚悟であります。この度の小冊子の発行にあたり、これまで支援して下さった方々に感謝申し上げますと共に、今後も変わらないご支援をお願いする次第であります。

目次

ハンセン病とは

理事長挨拶	1
1950年からのあゆみ	2
町医者たちのNGO	4
救ライ奉仕団創設者略歴	10
団受賞歴	10
梅本記念救ライ奉仕団の活動システム	11
公益信託梅本記念救ライ基金ごあんない	12

1950年からのあゆみ



インド 1967
インド救ライセンター

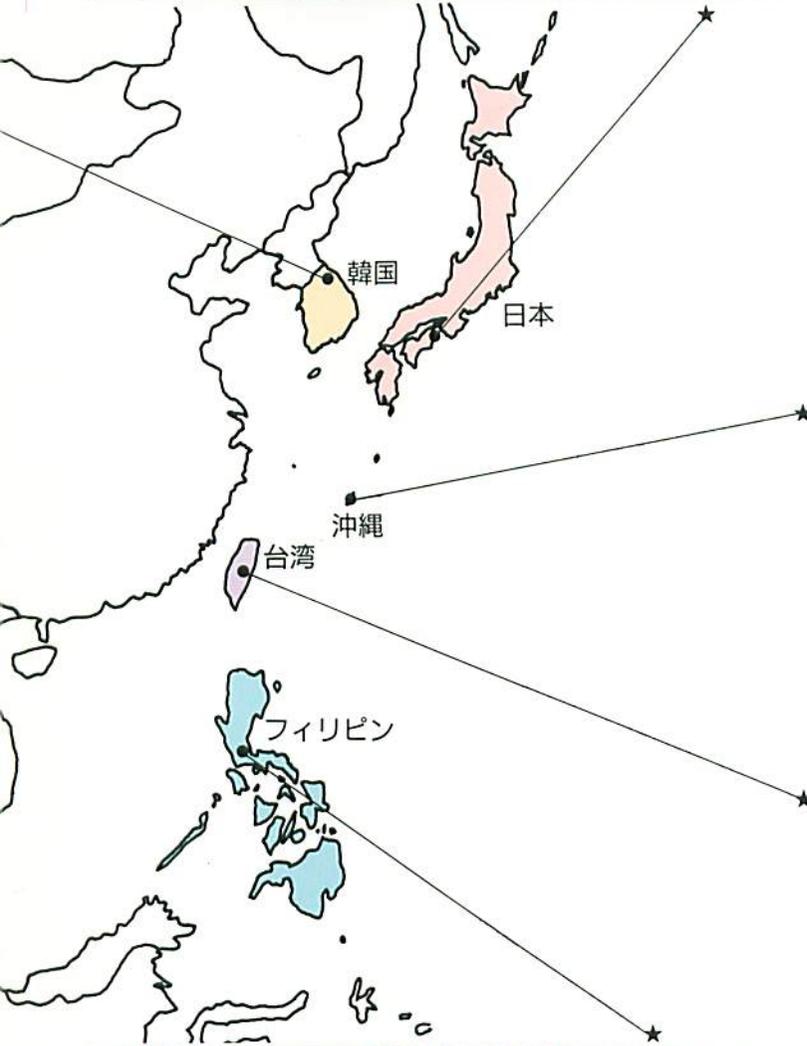


タイ 1987~1993
国立 ノンサンブーン・サナトリウム
// チェンライ・サナトリウム
// パパダイ・ホスピタル
ピサヌローク
マハーサラカーム
ローイエット
ウボン・ラーチャターニー



日本国内 1950～1977

- 国立療養所 長島愛生園 (岡山県)
- // 邑久光明園 (岡山県)
- // 大島青松園 (香川県)
- // 松丘保養園 (青森県)
- // 東北新生園 (宮城県)
- // 栗生楽泉園 (群馬県)
- // 多摩全生園 (東京都)
- // 星塚敬愛園 (鹿児島県)
- 国立 駿河療養所 (静岡県)



沖 縄 1960～1968

- 国立療養所 沖縄愛楽園 (沖縄県)
- // 宮古南静園 (沖縄県)
- // 奄美和光園 (鹿児島県)



台 湾 1964～1971

- 省立 楽生療養所
- 省立 楽山療養所
- 台湾特別皮膚科診療所



フィリピン 1977～1986

- ホセ・ロドリゲス・メモリアル・ホスピタル
- (セントラル・ルソン・サナトリウム)

町医者たちの NGO

非政府民間援助団体



眼下には紺碧の空、真綿の様に純白な雲のじゅうたんの上を滑るように C X 751 便は一路タイのドン・ムアン国際空港へ向けて順調な飛行を続けていました。機内は、この黄金週間に東南アジア各地でのバカンスを満喫しようと若い男女や女同士、男同士のグループで満席です。その中に初老から中年の男ばかりの7~8人の歯科医師のグループがありました。神奈川、京都、大阪、和歌山、岡山、山口と日本各地から乗り合わせた、ノー・ガイディッド・オブショナルツアー（これも略してN・G・O=ツアコンのいないオブショナルツアー）の参加者です。

このツアーの行先はタイで最も貧しい地域といわれている東北部、タンサルン湖の湖畔コーンケン市(強い木の意)でした。その目的はこの東北随一の交通の要衝を中心に周囲200キロの地域にあるマハーサラカーム、ローイエット、ラオスまで100キロもないウボンラーチャターニーへの巡回診療とのこと、5月といえどもそこはタイ、昼間の気温は42度の酷暑です。

でもどうして歯科医師がタイの辺境の地、それもレプロセリアム(ハンセン病療養所)などに行くのでしょうか？
そしてまた誰がこの様なユニークなツアーを企画したのでしょうか？

救ライ奉仕活動の産声

実はこれを企画したのは、今は亡き大阪歯科大学名誉教授(初代岐阜歯科大学学長)梅本芳夫博士と故舩松克彦先生(大阪歯科大学専門32回生)でした。

博士は若き日、当時の東京帝国大学伝染病研究所(現医学研究所)での細菌学講習会に参加された時、多摩の全生園を訪問され、ハンセン病(ライ菌による感染症)を病んだ幼い少女が家族から隔離され、一人薄暗い部屋でオルガンを弾いているうしろ姿をごらんになり、何か歯科医師として、いや人間として、この人達の力になれる事をしなければならぬと思われたようです。

昔はライ病は遺伝性の疾患と思われていました。

それは古くは聖書の中にも登場しました。かつてはチャールトン・ヘストン主演の『ベンハー』や、先日82歳で亡くなられた、故松本清張氏の秀作『砂の器』などの映画にも登場したように家系によって現れる病として考えられてきたのでした。

これは、ライ菌の持つ性状からきたものでした。繁殖力は弱く、現在なお純粋培養すら出来ない細菌でありながら、一度体の中でその居場所をみつけると、ゆっくりと、永い年月をかけて増殖し、発病してしまうのです。その期間は10~20年の期間で起こるため、いつ、誰から感染したのか分からず、まるで「遺伝」というのにピッタリな時間経過をたどって発病してしまいます。

発病した状態は今のエイズどころではありません。鼻は崩れ落ち、眼球は

真赤になって飛び出します、いたるところから膿が流れだし異臭を放ちます。

誰も近づけないし、近づこうともしません。まさに現代のエイズ以上です。

ハンセン病に対する一般社会の対応がこのような時期に、昭和25年、梅本芳夫教授は学生の細菌学の講義の中で抗酸性菌について話され、ライ菌に関しても詳しくその細菌学的特徴を講義されました。その講義の中で先の多摩全生園でのことを話され、学生達に協力を訴えられました。それにこたえ、当時は、まだ学生であった舩松先生は、日本各地の孤島や僻地に隔離されていた患者さんのために学生だけの演芸慰問団による奉仕を思いつきました。

この年、歯科大学の学生による日本で最初の救ライ奉仕活動がその産声をあげたのでした。

街頭募金から 基金創立へ

この学生達だけの演芸慰問奉仕活動は、ハンセン病(ライ菌による感染症)



患者の人達に大変喜ばれました。これに気を良くした学生達は自主的にその奉仕活動に情熱を傾けていきましたが、その活動の障害になったのは社会の人びとの偏見と活動資金の不足でした。

この二つの悩みを解決するため街頭募金活動を始め昭和46年頃まで後輩達

に引き継がれていきました。

啓蒙と言う意味での街頭活動は徐々にその成果を上げたものの、募金活動としては、大した成果はあがらず「救ライ募金公演」と銘打ったチャリティーコンサートを企画しました。その出演者も昭和25年の第1回から昭和55年の第45回まで30年にわたってその時代の各界の超一流の芸術家や舞台俳優・歌手の人達でした。

この様な歯科医師だけの救ライ活動に興味と理解を示された当時の皇太子殿下、同妃殿下を始め皇室関係者は我われの東京でのチャリティーコンサートに毎回ご臨席下さるようになりました。

これら30年余りにわたるコンサートの収益は、外務省管轄の公益信託「アジア・コミュニティー・トラスト」内の梅本記念救ライ基金の設立に用いられました。

歯科診療奉仕活動へ

数回の演芸慰問を重ねたころ、当時1400人の患者が療養していた岡山の長島愛生園の光田健輔園長や患者総代の方から「君達が来た時だけでもよいから歯科診療をして欲しい!!」との強い要望を受けました。当時は全国13の国立療養所ですら歯科医官が一人もない状態でした。強い要請にこたえて、さっそく翌年に2週間余をかけて全患者の口腔診査を完了しました。

口腔診査の結果は惨々たるものでした。患者の口腔内には多数のカリエスと歯周疾患による歯牙の早期喪失がみられました。そんな状態を知った学生達は、自分達がとるべき行動と何をしなければならないかが明確に理解出来たのでした。

さっそく自分達の出来る範囲で治療

器具や材料、薬品の調達に走り回りました。

こうして持ち寄った器具や知識を携え、第1回の国内でのハンセン病患者に対する初の診療奉仕活動が岡山県邑

久郡長島愛生園で行われました。

この話が他の園に伝わったのでしよう、瀬戸内海にある他のライ療養所から次々と歯科診療奉仕の要請があり、多くの学生達が休みを利用してその活



動に参加していきました。

国内各地の療養所での約10年にわたる診療奉仕活動に実績を積み重ねてきた学生や歯科医師達は、昭和35年当時はまだ米国の占領統治下に置かれていた沖縄に目を向け、毎日新聞社会事業団と共同主催することにより、第1回の海外派遣救ライ歯科診療奉仕団を歯科医師7人、学生6人、計13人の団員を沖縄愛楽園へ送り出すことが出来ました。

この団員や器材の輸送には「命の保障は一切しない」との契約のもと、日系2世タカバヤシ大尉の添乗で在日米軍のC54大型輸送機で運んでいただき、この時の梱包法輸送、通関、食料調達、対外交官との接触法などが、その後の台湾、韓国、フィリピン、タイへと発展していく海外診療の礎を築いていったのでした。

1960(昭和35)年から始めた占領下の沖縄での第1次海外救ライ歯科診療奉仕活動は途中2~3年の中断はあったものの、1968(昭和43)年まで続けられ診療実人数は約1600人以上に達した。



海外診療活動の始まり

そのころ梅本芳夫教授は、各地のライオンズクラブ(以下LC)やロータリークラブなどで救ライ活動とハンセ



ン病に対する啓蒙のための講演を精力的に行っていました。

あるLCでの講演会で教授の講演を聴かれた聴衆の中に故川崎誠蔵先生(東京歯科大学出身)がおられ、歯科医師と歯科大学の学生による社会奉仕活動に大変感銘を受け関心を示されました。

ご自分の所属する茨木LCが台北市(台湾)北区第7LCと姉妹関係にあったことから、台北の親しいメンバーの一人である黄啓森医師にこの話をされたところ、ぜひ中華民國に来て頂きたい、この奉仕活動はまさしくライオンズ精神の原点「We serve」であり、全面的にサポートしたいとの申し出があった。1964(昭和39)年、本当の意味での海外診療が歯科医師13人、学生10人で台湾の楽生療養院で行われました。

1971年梅本芳夫博士が岐阜歯科大学初代学長に就任され岐阜にも社会奉仕

部救ライ奉仕団が出来、この第4次台湾派遣に初めて岐阜歯科大学一期生の学生が3人参加しました。

1968(昭和43)年、日本と韓国の国交が回復してわずか3年しかたっていない韓国で国際親善の意味も含めて救ライ奉仕活動をやってみてはという話が持ち上がりました。団員の舩松克彦先生が毎日新聞大阪社会事業団と本団とでこの話をまとめ、米第5空軍の協

力も得て東京・立川から韓国の金浦空港を経由して光州へ人員と物資を空輸して頂きました。

光州からはバスで約6時間、早朝日本をたったにもかかわらず目的地の韓国最大の国立ライ療養所である小鹿(ソーク)島(済州島と韓国本土との間の東シナ海に浮かぶ孤島)の国立小鹿島病院に着いたのは真夜中の2時頃でした。

さっそく明朝から診療開始、島内の宿舎と診療所までは木炭車を使って40分、まず梱包を開け設営、患者さんには番号札を首からかけてもらい、壁には「壁カルテ」と名付けられた作業工程進行表を張り付けました。診療の内容は外科と補綴に分かれ、外科はほとんどが抜歯処置、補綴は義歯の作製でした。

学生達は先生方の助手です。外科では懐中電燈を口腔内に照らしたり、外科器具の消毒と準備、補綴に行けば印象材の練和、印象採得後のトレーを技工室へ持って行って石膏流しと休む暇もありません。奉仕活動をまのあたりにした韓国のハンセン病患者や回りの関係者は、当時半信半疑で接していたものの、診療が進むにつれて日本の救ライ奉仕団に対する理解と信頼が増し韓国内のラジオ・TV・新聞などで私達の活動が報道されました。その中で我われがもっとも感動した称賛のメッセージは「この診療は100人の日本人の外交官の仕事にも勝る」という一行でした。



コロポ計画が生んだ韓国救ライ奉仕会

1969(昭和44)年4月に第2次世界大戦の戦後賠償であるコロポ計画の一環として第2回の政府受け入れ留学生在がタイ、インドネシア、パキスタン、フィリピン、ボリビア、中華民国、韓国から大阪歯科大学にやって来た。7ヵ国の政府機関より派遣された優秀な8人の歯科医師達であり、それぞれ希望する専門分野について1年間の研修を受けることになっていた。大阪歯科大学側では受け入れのための担当教授を梅本芳夫教授として、彼ら8人を1年間にわたり公私共に世話することになった。

その中に韓国からやって来た劉東洙

(ユン・トンスー現ソウル大学歯科大学放射線科教室教授、当時37歳)がおられました。梅本教授は前年(1968年)に行った初の韓国における救ライ奉仕活動での苦労話や、ライ菌の細菌学的な性状なども含め自分が20年にわたって行って来た奉仕活動の話を一っきに語りかけた。ハンセン病という言葉にも驚いたが、それ以上に韓国人である自分ですら知らない東シナ海の孤島にある療養所に日本から多くの歯科医師や学生が韓国のハンセン患者の歯科医療のためにやって来て

いたことに深い感銘を受け、さっそくソウルに手紙を書いて当時インターンであった明魯哲(ミョン・ノチュル)先生に歯科医師と学生を集めるように指示した。

その結果7月17日～8月2日までの



第2次韓国救ライ歯科奉仕活動にソウル大学からも歯科医師2人と学生4人が初参加することとなった。劉助教授も夏休み中であったため、急遽、韓国に一時帰国して参加することになった。この日韓合同の奉仕活動が契機にな

り、日本での研修を終え帰国した劉先生はさっそく大学内にソウル大学歯科大学救ライ奉仕会を創設し、以後25年の間この活動は継続されている。

ハンセン病を通じて結ばれた日韓の師弟関係は1982年大きく花開き「社団

法人韓国救癩奉仕会」となった。これはNGOの真髄である「人」の育成を重視したもので単なる物品の援助のみを先行させたものではない良いケースであった。

フィリピンでの苦難

1977年、第3の海外診療の地を比国(フィリピン)としその一歩を踏み出



した。2～3年前から舩松克彦先生により事前調査が行われ診療地の選定、患者の口腔検診などは終わっていた。そこはマニラから約2時間ケソン市の郊外にあり、比国最大のハンセン病サ

ナトリウムであるセントラル・ルソン・サナトリウム(現ホセ・ロドリゲス・メモリアル・ホスピタル)である。比国では隔離政策をもっていないため開放的で広大な敷地の中で患者が家族と一緒に暮らしている。

スペイン皇太子フェリペにちなんで命名された国名、その血も陽気で根っから明るい、物事を依頼するとすぐに引き受けてくれるが、なかなかやってくれない。日本や韓国、中国などの東アジアの国での価値観や常識は通用しない。いざ仕事を始めるとなかなか歯車が合わない。韓国で良い結果の得られたNGOを比国でもとの願いから、現地在住の日本人通訳トシコ・ホンダとミドリ・アキノ女史にも協力を依頼し、各歯科大学や歯科医師会を駆け回り活動への協力と理解を求めたが良い結果は得られなかった。

その上事前調査を含めて約10年間の比国での活動中、この奉仕活動の2本の柱であった舩松克彦先生と梅本芳夫教授をつぎつぎと亡くし奉仕団そのも

のも存続の危機にさらされました。

マルコス政権の終焉と共にフィリピンを撤退せざるを得なくなった我われは、厚生省より出向していた在比日本領事館の医師の言葉がすごく心に引っ掛かっていた。

「比国でよい成果をあげなければ、これ以上南へいってもだめでしょう。」これ以上南へは一度も行った事はない。

今まで30年以上も続けてきた救ライ奉仕活動自体が時代のニーズにそぐわなくなったのであろうか、などと考え始めるともうこれ以上南下するのは無理かもしれない。そのため新たな候補

地をさがすため各方面への問い合わせや政府筋への打診の結果、理事会でタイへの事前調査が決定された。



新天地タイでの活動

タイ国での交渉窓口はタイ厚生省の中にあるCDC（Communicable Disease Control 伝染病予防局）である、伝染病に関する多くの課よりなり、当時ライ予防課の課長はパラチョンポン女医であり、実務は事務官のサチアン氏であった。彼はタイにおけるライ予防、治療プログラムを任せられ対外的な窓口になっていた。どの国の官庁でも課長というポジションは4～5年で変わるため、我われは真の交渉窓口を彼と決め、会う度に活動の方針や日本側の考え方を説いてきた。その結果、



彼らの最も望んでいる援助をすることが出来た。

しかしこれらの援助品や器材を有効に生かすには、これらを維持する援助を続けながら人材を育成するしか大きな発展の道はない。今まさに私たちはその最終的仕上げの段階に入っている。

現在タイでのハンセン病患者は22,314名と発表されているが実数は正確には把握できていないタイ全土にサナトリ



ウムや定着村が点在している。

患者とその家族は離散することなくコロニーや定着村の周囲に家をかまえいっしょに暮しているいわゆる開放政策をとっている。

歯科医療に関しては自国の力ではそこまでまだ手がまわらないのが現情であり、われわれもその啓蒙活動に忙しい現情である。日本人歯科医による治療も外科処置が中心で義歯を作製する段階までにはいたっていない。

NGOとしての活動

最近、国の内外でボランティア活動をする日本人が増え、ある人がテレビで日本語にはボランティアにあたる適当な言葉が存在しないのではないかと発言されていたが、我々もその通りだと思っている。我々のグループは40年も前から奉仕団という言葉を使っており、その英訳も Service Group となっている。馴染んでいるためか、この方が何となく自分のやっている事が理解しやすいように思われる。奉仕活動と

いうものは自らの意志がどんなに高潔で崇高なものだと思っても、相手あつてのことである。どんな立派な意志がそこに存在しても相手が「ノー」と言えばそこまでである。つまり何を相手が望んでいるかを見極め、相手の気持ちや、プライドを傷つけないような配慮が一番大切である。つまりその活動に気負い過ぎずに、自分の出来る事を継続して行う事に尽きると思っている。

我われの救ライ奉仕活動にしても約40年間にわたって継続してきた事に大きな意義があるように思われる。継続は「力」と同時に、相手に対す

る奉仕だ援助だと思っていた事が、実はどれほど自分自身に教えられる事が多かったことか……。また自分といろいろな人や国との間にかけていけない信頼や絆が生まれてくることも時間が教えてくれたのであった。

救ライ奉仕団創設者略歴



梅本芳夫博士略歴

明治40年 6月25日 東京都赤坂区伝馬町に生れる
昭和18年12月 大阪歯科医学専門学校教授(細菌学講座担当)
昭和24年 7月 大阪歯科大学教授(細菌学講座担当)
昭和46年 2月 岐阜歯科大学学長、学校法人岐阜歯科大学理事
昭和46年 4月 大阪歯科大学名誉教授
昭和56年 3月 岐阜歯科大学退職
昭和58年12月 1日 逝去

受賞

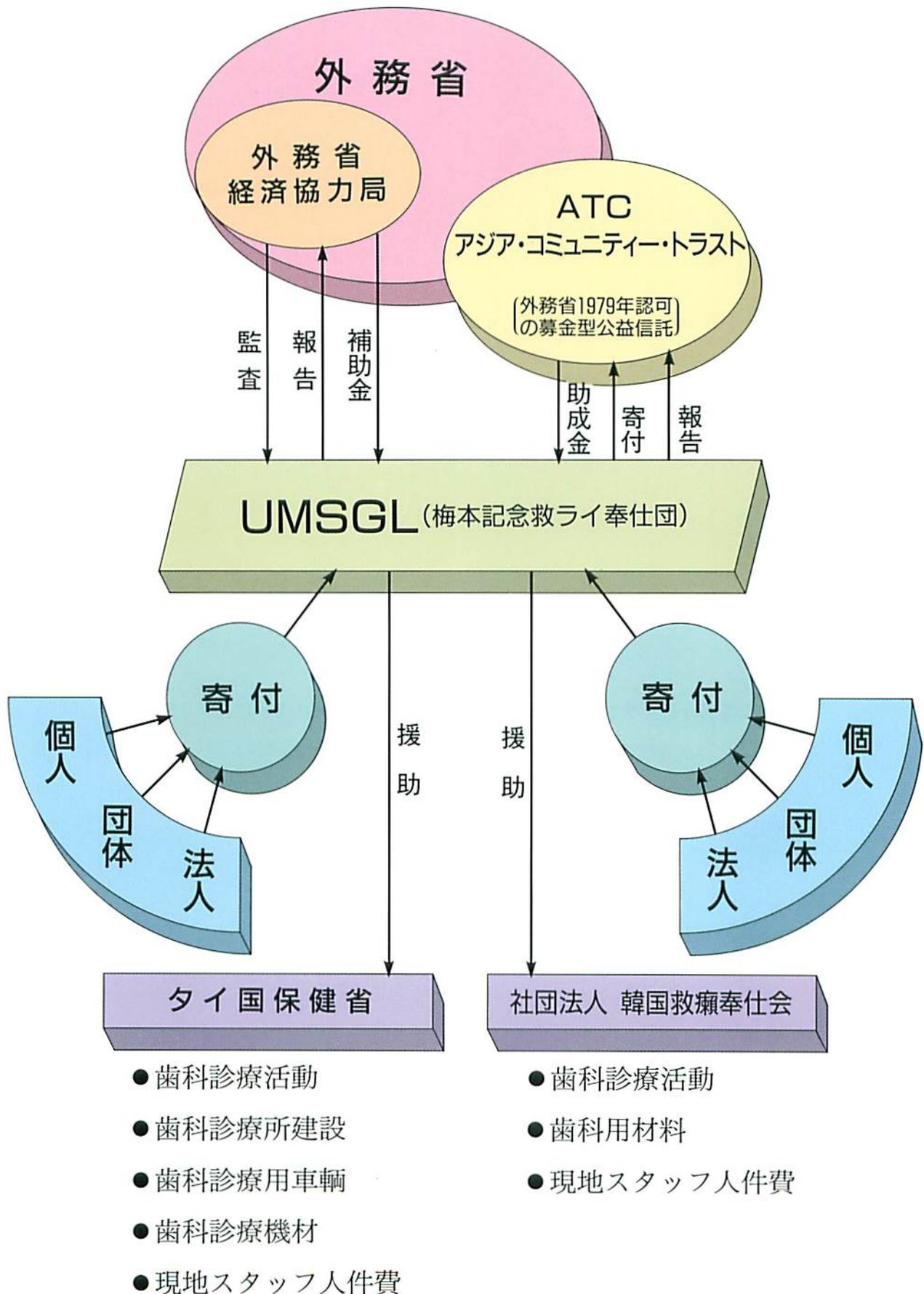
昭和17年 8月 叙勲五等瑞宝章
昭和20年 7月 叙正七位
昭和53年11月 3日 叙勲三等旭日中綬章
昭和58年12月 1日 叙従四位

団受賞歴



昭和49年
大韓民国大統領より冬柏賞
昭和50年
第27回保健文化賞
平成 2年
タイ国保健省CDCより表彰
平成 4年
外務大臣表彰を受賞

UMSGL 活動システム activity system





梅本記念救ライ奉仕団は みなさまのご寄付をお待ちしています。

アジア各国から我々に寄せられる期待は大きく、私たちはそのすべてに応えることができません。どうか皆様の暖かいご支援を梅本記念救ライ奉仕団ではお待ちしております。

私達によせられた浄財は我々のアジアでの歯科診療奉仕活動にあてられると共に、梅本記念救ライ基金の基本財産にくみこまれます。

1950年から行ってきた街頭募金やチャリティー・コンサートの収益金をもとに、1979年11月7日 外務省認可のもと日本初のアジア・コミュニティー・トラスト（募金型公益信託）が誕生し、その内に梅本記念救ライ基金を1983年6月に設立しました。

アジア・コミュニティー・トラスト（ACT）の特色は、運営委員会のもとで専門のスタッフが直接アジア各国に赴き、状況を確認直接援助を行う点にあります。また助成後も一定期間にわたってスタッフがプロジェクトの進行状況をモニターし、ご寄付いただいた皆様の善意が正しく効果的に使われているかどうかを確認しております。



こんなご寄付の方法も
あります。

賛助会員

寄付手続の繁雑さを避けるため、毎年1回、定期的にご寄付をいただく方法です。以下の年会費をお納めください。

普通会员

個人	1口	10,000円から
団体法人	1口	50,000円から
特別会員	1口	100,000円から

寄付金及び
賛助会費の
ご送金先は…

東洋信託銀行茨木支店

口座名

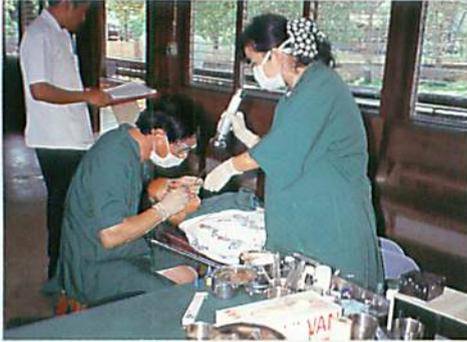
梅本記念救ライ奉仕団

理事 恩田 信雄

口座番号

普通預金/ 9215920

タイでのプロジェクト



チェンライ



コーンケン



ウボンラーチャターニー



マハーサラカーム



パバダイ



ローイエット



梅本記念救ライ奉仕団事務局

本 部 / 〒230 神奈川県横須賀市稲岡町82 神奈川歯科大学口腔細菌学教室 Tel.0468-22-8867
 大阪支局 / 〒569 大阪府高槻市高槻町11-9 イバラギヤビル 2 階 Tel.0726-82-8800

御援助を戴いている

諸団体並びに企業名

(順不同)

外務省経済開発協力局
公益信託アジアコミュニティトラスト (ACT)
㈱ 笹川記念保健協力財団
東洋信託銀行 ㈱
住友信託銀行 ㈱
㈱ 住友銀行
㈱ 三和銀行
㈱ 大和銀行
松下電器産業 ㈱
住友金属工業 ㈱
関西電力 ㈱
住友化学工業 ㈱
大阪瓦斯 ㈱
住友電気工業 ㈱
サントリー ㈱
住友商事 ㈱
住友生命保険 ㈱
日本生命保険 ㈱
ダイキン工業 ㈱

住友海上火災保険 ㈱
日本板硝子 ㈱
武田薬品工業 ㈱
塩野義製薬 ㈱
住友製薬 ㈱
田辺製薬 ㈱
藤沢薬品工業 ㈱
大日本製薬 ㈱
小野薬品工業 ㈱
日本新薬 ㈱
吉富製薬 ㈱
㈱ サムヨーメディコム
医療共済会
亀水化学工業 ㈱
㈱ モリタ
㈱ 松風
㈱ ジーシー
タカラベルモント ㈱
㈱ 東美屋歯科商店
サンスタール ㈱

賛助会員申込書

梅本記念救ライ奉仕団の趣旨に賛同し、賛助会員として入会し、下記の年会費を支払うことを承諾いたします。

金 円也

但し、個人会員	(一口1万円)	口分
法人・団体会員	(一口5万円)	口分
特別会員	(一口10万円)	口分

年 月 日

(個人)

氏名： 印
住所： (〒)
電話：

(法人・団体)

名称：
代表者： 印
住所： (〒)
事務ご担当者：
所属部課名：
電話：

※振込先

東洋信託茨木支店

口座名： 梅本記念救ライ奉仕団
代表 恩田 信雄

口座番号： 普通預金 9215920